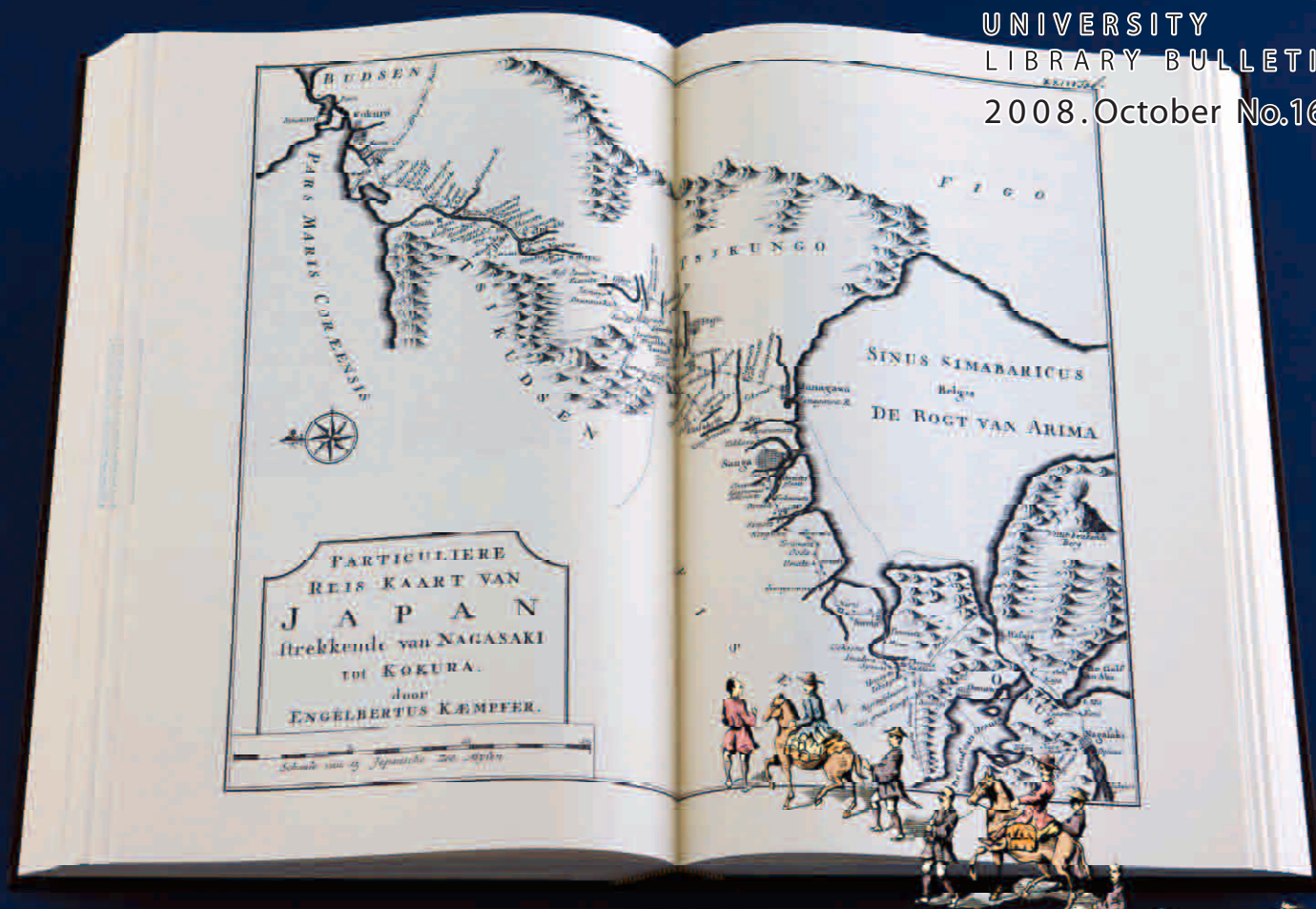


図書館報

SEINAN GAKUIN
UNIVERSITY
LIBRARY BULLETIN
2008.October No.165



世界の図書館 オーストラリア編

- | | |
|--|--|
| <p>1 美術家と本(3)
モホイ=ナジとグロピウス あるいは「建築的な本」 図書館長 後藤 新治</p> <p>2 研究ノートから
世界/人間実存の根としての「ユダヤ人問題」 神学部 神学科 教授 天野 有
ブラウジングルーム
六法を手にとる 法学部 法律学科 教授 石森 久広</p> <p>3-4 世界の図書館 オーストラリア編
ディーキン大学図書館 文学部 外国語学科 英語専攻 教授 武井 俊詳
マツコーリー大学図書館 商学部 経営学科 教授 吉武 春光
ヴィクトリア州立図書館 経済学部 経済学科 教授 マイケル・ミュー</p> | <p>5 知らないと損をする！
レポート・論文作成法
読めないで、卒業論文を書こう 人間科学部 社会福祉学科 准教授 山本 裕子</p> <p>6 使ってみようシリーズ(9)
コピーコーナー 図書情報課 山下 大輔</p> <p>7 蔵書ギャラリー no.6
ケンペル『日本誌』ファクシミリ版 経済学部 経済学科 准教授 島田 竜登</p> |
|--|--|

美術家 と本

3



写真1: パウハウス時代のラスロー・モホイ=ナジ。写真家の麦ルチアによる1926年の撮影。[参考文献4]



写真2: パウハウス初代校長時代のヴァルター・グロピウス。1920年、ヴァイマルにて。[参考文献2]

モホイ=ナジとグロピウス あるいは「建築的な本」

図書館長 後藤 新治

「ニューヨークの街全体を建設するより一冊の本を作るほうがはるかに難しい。」こう言い放ったのは第1回目で紹介した画商で出版者のヴォーラーでした。造本を建築(都市計画)に譬えた比喻ですが、今回は建築家自身が美術家と組んで生み出した本のお話です。建築家はドイツの近代デザインと建築の学校パウハウス初代校長ヴァルター・グロピウス(1883-1969) [写真2]、美術家はグラフィックデザインと新しい写真の可能性を追求したハンガリー出身のラスロー・モホイ=ナジ(モホリ=ナジとも、1895-1946) [写真1]、生まれた本は「パウハウス叢書」[写真3]。

1923年に予備課程のマイスター(親方)として着任したモホイ=ナジは、専門化することで分断・細分化した芸術領域やイズムを、新しい視野から統合・再結合するため、グロピウスと共同編集で14冊の書物を刊行しました。パウハウスの名を世に知らしめた「パウハウス叢書」の誕生です。そこには「あらゆる造形活動の最終目標は建築である」と宣言したグロピウスの願いも込められていました。諸芸術の総合としての建築。「建築的な本」たる所以です。

執筆者にはグロピウスやモホイ=ナジをはじめ、クレー、カンディンスキーといったパウハウス教授陣のほか、オランダからモンドリアン、フランスからグレーズ、ソヴィエトからマレーヴィチが加わるなどまさにその顔ぶれは汎ヨーロッパ的でした(タイトルの詳細は参考文献を参照)。多彩な内容にもかかわらずこれらが統一感のある視覚的メッセージを与えているとすれば、それは叢書のブックデザインを一貫して手がけたモホイ=ナジの功績にほかなりません。

造形的な特徴の第一に構成主義的なグラフィックデザインが挙げられます。色数を抑制し、水平と垂直の線を主軸に幾何学形態や記号のみで構成した、ストイックで理知的な機械時代にふさわしい画面作りです(第2、5、7、11、13巻)。

第二が新しいタイポグラフィ。タイポグラフィとは一般に活版印刷術のことですが、モホイ=ナジはタイポグラフィそのものを「情報伝達的手段」と捉え、そこに「明晰さ」(読み易さ)と「強力な形式」を求めました。これはその後ヒゲのない肉太のサンセリフ体と小文字の採用へと至ります(第12、14巻)。

第三はこのタイポグラフィの要素に活字だけでなく写真の要素が加わった「タイポフォト」あるいは「フォトテキスト」とモホイ=ナジが呼んだもの(第8、10巻)。彼は写真を「その客観性についていかなる個別的解釈も許容しない正確な表現形式」と擁護しました。写真が客観的かどうかは別にして、彼は収集選択した写真を文字テキストと組み合わせることで紙面レイアウトを革新し、結果として広告デザインへの道を開いたのです。

ドイツ革命後に生まれたパウハウス(1919-33)はその母体であるヴァイマル共和国とともにナチスによって命運を断たれました。その意味でパウハウスが追い求めた総合芸術としての「建築」とは、見果てぬ「革命」の代替物であり、政治変革を生活革命によって成し遂げようとしたユートピアだったのかも知れません。(国際文化学部 国際文化学科 教授)

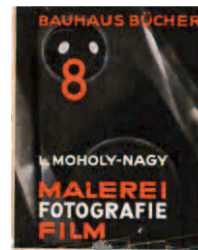


写真3: グロピウスとモホイ=ナジの共同編集になる「パウハウス叢書」14冊のうちモホイ=ナジがカバーデザインを担当した9冊。出版は1925〜30年[参考文献1&5]

<参考文献>

- 利光功・宮島久雄・貞包博幸編「パウハウス叢書」、中央公論美術出版、1991〜99年①ヴァルター・グロピウス(貞包博幸訳)「国際建築」[開架2階 523/06/4]、②ハル・クレー(利光功訳)「教育スケッチブック」[開架4階 704/0/150]、③アドルフ・マイヤー編(貞包博幸訳)「パウハウスの実験住宅」[開架2階 527/0/43]、④シュレンマー、モホリ=ナジ、モルナール(利光功訳)「パウハウスの舞台」[開架4階 771/5/1]、⑤ピート・モンドリアン(宮島久雄訳)「新しい造形(新造形主義)」[開架4階 704/0/151]、⑥テオ・ファン・ドゥースブルフ(宮島久雄訳)「新しい造形芸術の基礎概念」[開架4階 701/0/55]、⑦ヴァルター・グロピウス(宮島久雄訳)「パウハウス工房の新製品」[開架4階 750/0/9]、⑧L. モホリ=ナジ(利光功訳)「絵画・写真・映画」[開架4階 740/0/9]、⑨ヴァン・カンディンスキー(宮島久雄訳)「点と線から面へ」[開架4階 723/06/7]、⑩J. J. P. アウト(貞包博幸訳)「オランダの建築」[開架2階 523/359/1]、⑪カジミール・マレーヴィチ(五十嵐治治訳)「無対象の世界」[開架4階 723/06/8]、⑫ヴァルター・グロピウス(利光功訳)「テッサウのパウハウス建築」[開架2階 523/34/4]、⑬アルベール・グレーズ(貞包博幸訳)「キュービズム」[開架4階 723/06/6]、⑭L. モホリ=ナジ(宮島久雄訳)「材料から建築へ」[開架4階 704/0/145]、別巻1「美術・デザイン・政治・教育 パウハウスとその周辺I」[開架4階 707/0/10-1]、別巻2「理念・音楽・映画・資料・年表 パウハウスとその周辺II」[開架4階 707/0/10-2]

<参考文献>

- Hans M. Wingler: *The Bauhaus Weimar Dessau Berlin Chicago*, Cambridge, The MIT Press, 1986 (1978)
- 利光功「パウハウス 歴史と理念」、美術出版社、1988(1970)年[開架4階 702/0/10]
- László MOHOLY-NAGY, *Musées de Marseille-Réunion des musées nationaux*, 1991
- 「パウハウス展 ガラスのユートピア」、宇都宮美術館、2000年
- 井口壽乃「ハンガリー・アヴァンギャルド MAとモホイ=ナジ」、彩流社、2000年[開架4階 702/347/1]

世界/人間実存の根としての「ユダヤ人問題」

神学部 神学科 教授 天野 有

この夏、私は一つの説教（「イエス・キリストの教会」というタイトルで収録。注1）を翻訳することでほとんど明け暮れた。それは、スイスの神学者カール・バルト（1886-1968）が1933年12月10日、ドイツで行なったものである。時代はナチズム政権成立から10ヶ月、ドイツ国内の反ユダヤ主義の嵐がすでに吹き始めていた（芝 健介『ホロコースト』中公新書、2008年、29頁以下；注2）。翌日直ちに（バルト自ら添文を付して）ヒトラー宛に送り付けられることになるその説教で、彼はこう言ったのだ。「イエス・キリストはユダヤ人であった」と。そして、説教の最中に数人の聴衆が「抗議の意思表示のために」教会を立ち去った（その中には彼の神学ゼミに参加していたナチ信奉者の一女子学生もいた！）。

それから33年後、80歳を目前にしたバルトは、スイス・チューリッヒの美術工芸学校の学生たちから「ユダヤ人問題」について問われ、大要次のように答えている。キリスト教はユダヤ民族から成長してきた。この民族は神との全く特別な経験を重ねてきており、この経験は全世界にとって実に大きな重要性を持っていると聖書は告げる。そしてユダヤ人はイエスの民でもある。——7羽のカラスがいるとしよう。6羽は黒、1羽は白だ。自分たちとはどこか違っているというただそれだけの理由で、黒カラスたちは白ガラスをいじめ、迫害する。ユダヤ人も同様だ。旧約聖書は、

ユダヤ民族がどんなに「特異」でありその考えや行動がどんなに「独特」であるか、を私たちに示す。「まさにヒトラーはこの（ユダヤ民族の）奇妙さを、この白ガラスのことを、認識していました。だから彼はユダヤ人を根絶やしにしようとしたのです」。しかし、ユダヤ人は、今日に至るまで、私たちにとって「言わば生きた聖書」なのだ。そして、聖書を根絶やしにすることが不可能なように、誰にもユダヤ人を根絶やしにすることなどできはしない。……（Karl Barth, *Gespräche* 1964-1968, Zürich 1997, S.207-208; 注3）。

「ユダヤ人問題」は、人種問題でも人権問題でも、しかしまた単なる宗教問題でもない。反ユダヤ主義の歴史が「ヨーロッパ文明に伏流する地下水脈」（内田 樹氏の『反ユダヤ主義の歴史』全巻のための推薦文より；注4）ならば、ユダヤ人の歴史は「世界史を理解するための鍵」（バルト）だろう。そしてまた、ナザレのイエスがユダヤ人であるがゆえに、「ユダヤ人問題」は（あらゆる時代・地域・民族・宗教・無宗教・反宗教を貫通しつつ）、すべての人間のアイデンティティの根っこに直に関わる実存問題でもあるのではないかと、今私は考え始めているところである。

注1: Karl Barth, *Die Kirche Jesu Christi*, München, Chr. Kaiser, 1934 [開架 192/5438/Th36c(5)] (写真左) 注2: [開架2階 096/234/12] 注3: [開架 191/9/6-4-3] 注4: 『反ユダヤ主義の歴史』全5巻、筑摩書房、2005-2007年 [開架3階 316/88/141~141-5] (写真右)



ブラウジングルーム

六法を手にとる

法学部 法律学科 教授 石森 久広



参考図書コーナー（注1）には、私たち法学専攻の者には欠かすことのできない六法の類が揃えてあります。現在、法令を調べるには、総務省「法令データ提供システム」（注2）が手軽に利用でき、最新で無料、しかも政省令まで洩れなく調べられます。それでも六法を手にとる感触には特別なものがあり、1本の法律でもあっちを見たりこっちを見たりと、法律にとっても贅沢に触れる感覚は捨てることができません。

法律は毎年制定改廃が繰り返されるため、そこには常に最新の六法が備えられています。古い六法は書庫へと移動されます。改正がどのようになされたかを調べるには、実は現行法を調べるのに比べると大変大きな苦勞が伴います。法令の改変は「〇〇条の『□□』を『△△』に変更する」というような形で行われ（溶け込み方式）、以後、新しい〇〇条の条文からは□□という言葉が消えてしまうからです。つまり、最新の六法を見てもどこがどう変わったか分からないのです。そこで、□□が問題になった当時の判例に出くわすと、□□の条文を探さなければいけなくなります。本学の場合、5階の書庫に過去の「六法」がずらりと揃えてあり、該当年度のものを調べるということで対処します。とても原

始的な方法ですが、私はこれが大好きで、目当てのもののほか、自分が入学した年度の六法に見入るなど、書庫に入るとしばし時間が止まります。法学を勉強する人はぜひ一度見る機会があるとよいと思います。

ところで、数年前の夏、明治以来の全法律の改正経緯をまとめる「日本法律事典」の出版が企画され、大人数の執筆陣のなか、私も10数本の法律を担当することになりました。いつ、どの条文がどれほどの重要性をもって改正されたのかは、国会図書館ホームページの国会会議録検索システム（注3）を利用することで、その審議状況で詳しく知ることができます。ところが、私の担当する法律の中には明治時代に成立したものもあり、これはどうしたものか行き詰ったことがあります。そんなとき、大学に来る途中、ふと立ち寄った福岡市総合図書館で「帝国議会議事録」（注4）を見つけました。ただし当時の文字が難しくて読めません。以来、何日か通って解読にあたり、解読できた限りで苦勞して原稿をまとめたことを思い出します。結局、原稿を出せない先生が続出したとのことで刊行は中止され、幻の本となりました。

そんななか、先日、過去の「六法全書」をすべて1枚のDVDに収録した資料（注5）の案内書を目にしました。もちろん、申し込みました。しかし、私はまた法学を志したあの日に帰るために、きつと書庫に通うことでしょう。その思いは、帝国議会議事録の1文字1文字を追ったあの日々の思い出ともびつたり重なります。

注1: 3階参考図書コーナー 注2: <http://law.e-gov.go.jp/> 注3: <http://kokkai.ndl.go.jp/> 注4: 帝国議会議事録検索システム (<http://teikokugikai-i.ndl.go.jp/>) として一部（第52～92回 昭和元年～22年）公開 注5: 「六法全書」電子復刻版、有斐閣、2008年 [視聴覚 320/D-ROM/ROP]

世界の図書館

[オーストラリア編]



[ディーキン大学図書館(メルボルンキャンパス)]



[マッコーリー大学図書館(左端の建物)]



[ヴィクトリア州立図書館]

ディーキン大学図書館

Deakin University Library Melbourne Campus at Burwood: 221 Burwood Highway, Burwood Victoria 3125 AUSTRALIA
<http://www.deakin.edu.au/library/>

文学部 外国語学科 英語専攻 教授 武井 俊詳

1 1990年8月末から1991年の9月の初めまでの1年間在外研究で過ごしたオーストラリアのビクトリア州メルボルン都市圏での思い出はつい数年前のことのように鮮明だが、現実はそのときから20年近く経過した。あの時は、主として、Monash大学を拠点とした研究生活だったが、研究環境だけでなく、家族(妻と当時小学校5年生だった娘)の生活環境の世話までしてくれた、アンジェラことMs. Angelina Del Bianco(同大学大学院生チューター)が10年ほど前から、Deakin University(2代目首相のAlfred Deakinに因む大学;以下D大学)で大学院生チューターとして勤務していて、彼女が同大学を自慢にしているの、寄稿依頼を受けた本学図書館報の『世界の図書館 オーストラリア編』には、D大学の図書館の紹介をすることにした。

D大学は設立が1974年というオーストラリアでも新しい大学で、それだけに、主として、「キャンパス外での教育」に新機軸を打ち出し、きめ細かく柔軟な教育サービスを提供することに傾注し、急速に高い世評を得た。ビクトリア州という広大な州内(面積は本州に匹敵)に4つのキャンパスを配していることも、オンライン教育のネットワークを張り巡らせた一因だ。

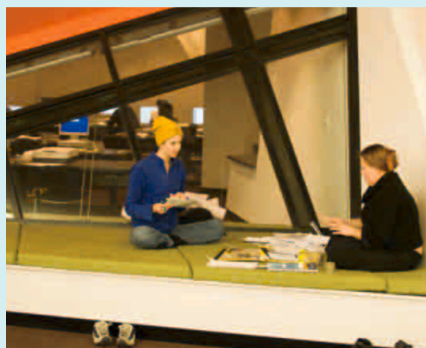
その体制の機能的中心が図書館である。そしてキャッチフレーズは“flexible education”(学生は目標とする学位取得のために柔軟な履修方法が選べ、

オンライン履修もその1つ)。4つのキャンパスにはそれぞれの図書館があるが、それらは一体となったウェブ環境として統合され(The Library)、IT企業のInnovative Interfaces Incを開発のパートナーとし、Encoreという多くのWeb 2.0のfeatureを組み入れた探索発見のためのインターフェースを開発しその分野の最先端を走る。The Libraryが提供する

広範囲のオンラインの情報サービスを享受するためのサポート体制も充実している。オンライン支援は勿論、専門家によるパーソナルな支援も行き届き、一方、情報スキル開発プログラムなど手厚い。

図書館の建物としての施設の特徴は、蔵書・資料の豊かさは当然のことながら、利用環境としても心地よさを追求している。現行の2つの施設改修企画は、学生・教職員の旺盛な研究・学習意欲に応えるため、The Libraryのモットーである「蔵書及び学習空間におけるヴァーチャルと現実の結合」の具現として、先端技術の粋を集めた共同研究スペース、くつろぎ空間、議論のための談話室、動画や音楽を

直接ダウンロードできるマルチメディア視聴室などを完備した図書館造りとのこと。来年2009年には、The Alfred Deakin Prime Ministerial Libraryが完成の予定。その名に因む2代目首相の記録の収集・管理と公開そしてThe Alfred Deakin Instituteの支援事業を行う。



[ディーキン大学図書館 メルボルンキャンパス]

(写真提供:ディーキン大学)

筆者は、本学から在外研究の機会を与えられて、2006年4月から1年間、オーストラリア最大の都市シドニーにあるMacquarie Universityの Department of Computing に訪問教授として滞在しました。

オーストラリアは、日本の22倍の面積に、日本の1/6の人口が住んでいます。オーストラリア大陸の中で人が住んでいるのは海岸に沿った雨が降る地域で、中心部は赤茶けた砂漠地帯になっています。オーストラリアは南半球に位置しているので日本とは季節が逆です。7、8月頃がもっとも寒く、シドニーでは福岡の3月初めの気候のようでした。もっとも暑いのが1月で、福岡の6月下旬のような気温でした。砂漠型気候だそうで、一日の寒暖の差が10度以上あります。基本的に毎日が澄み切った青い空ですが、時折、シャワー的な雨が降ります。

Macquarie Universityは、1964年にNSW州によって設立された公立校です。学生数は約3万人で、大学院の比率が高く、中国人、韓国人、インド人など色々な国の学生がいます。キャンパスは、シドニー中心部から西北西20Kmの丘陵に位置し、少し起伏のある広大な土地(学内にゴルフコースがあります!)に、建物が散在しています。Libraryは、キャンパスのほぼ中央に位置し、蔵書は140万点以上です。Libraryの最大の特徴は、大学の名前にもなっているMacquarie夫婦についてのデジタルアーカイブ <http://www.lib.mq.edu.au/digital/> でしょう。Macquarieというのは、イギリス植民地時代の有名な総督の名前です。パンを盗んだというような軽微な罪でもオーストラリアに島流しになっていた時代に、流刑囚の



[館内の様子]

人権を尊重した名総督だったそうです。シドニーにはMacquarieの名を冠した場所が沢山あります。

設備的には、IT施設との融合が行われています。館内には自由利用PCと検索用PCがありますが、無線LANが広範囲で利用出来ます。館内は勿論ですが、芝生の上でも使えます。かなりの学生がノートパソコンを持ち歩いており、オンラインジャーナルの利用は、ノートパソコンからでも可能でした。運用で驚いたのは、日曜日でも利用出来ることでした。更には、地元の高校生にも開放されていました。面白いと

思ったのはOvernight loansという制度です。これは、閉館3時間前から本を貸し出し、翌朝9:05amまでに返却箱に戻すという仕組みになっています。貸し出し冊数の上限にはカウントされないようです。また、館内は2つの色分け表示がしてあります。青色表示はQuiet zonesと呼ばれる、静かに読書するエリアですが、緑色表示は、軽飲食をしても良く、ノートパソコンもつなげ、小声で話して良いというエリアです。図書館の伝統的な姿と現代の学生の要求とを旨くマッチングさせた結果でしょう。

また、Library Friendという制度が目につきます。これは年間AU\$20(学生AU\$10)を出せば誰でも会員になれるというもので、色々な特典があるようです。Libraryを大学だけのものとはせずに、広く、一般に公開しているのが分かります。

さて、Libraryは少し手狭なこともあり、2010年オープンに向けて新建屋の建築が決まっており、青写真が既に公開されています。

(出典:[前ページ写真] 著者撮影/[文中写真] flickr.com)

ヴィクトリア州立図書館

State Library of Victoria: 328 Swanton Street Melbourne Victoria 3000 AUSTRALIA
<http://www.slv.vic.gov.au/>

オーストラリア第2の都市、ヴィクトリア州の州都メルボルン。人口370万のこの街は、多民族国家であるオーストラリアの中でも特に移民が多いことで有名で、様々な人種、言語が溢れている。州政府は留学生の受け入れにも積極的で、メルボルンは世界で最も留学生の多い街のひとつでもある。『State Library of Victoria』(ヴィクトリア州立図書館)は、そんなメルボルンのど真ん中、トラムと呼ばれる路面電車が賑やかに行き交うラトロブ通りとスワンストン通りの角にある。

トラムを降りてすぐ目に入るのは、図書館の前庭だ。緑の芝生が広がる庭は開放的で、天気の良い日には思い思いに寛ぐ人々の姿が見られる。図書館の建物はヴィクトリア朝の堂々とした石造り。1856年、オーストラリアがイギリスの植民地であった時代に建造されたもので、大きな柱の並ぶ荘厳な建築はゴールドラッシュで潤っていた当時の面影をそのままに残している(前ページ写真)。

私がこの図書館に通っていたのは、今から25年以上も前、図書館と同じ通りにある法学校で弁護士の実習をしていた時のことである。法学校での授業の後、この図書館に来て、模擬裁判の準備のため過去の法令や判決の記録を調べるのが日課であった。今でも思い出すのは、閲覧室に足を踏み入れた時の静謐な空気だ。外の



[ドーム型天井のある閲覧室]

喧騒とは別世界、天井の高い八角形の閲覧室は、壁をぐりと重々しい書棚で取り巻かれ、昼間でも薄暗く、古い書物独特の紙とインクの匂いが漂っていた。年代ものの緑色のランプの備えられた机に向かい、過去の裁判の記録のページをめくっていると、時間を遡り昔の世界に入り込んだような不思議な感覚に捉われることもしばしばであった。

図書館は2003年に近代的に改装され、閲覧室はドーム型の天井から日の光が射し込む明るい空間に生まれ変わった(写真)。現在は入り口を入るとすぐに『experimedia』と呼ばれるコンピュータが並ぶホールがある。インターネットが自由に利用できるため、近くのメルボルン大学やRMIT大学の学生達にもよく利用されている。ここを待ち合わせの場にする留学生も多い。図書館の蔵書は200万冊、記録文書も充実しており、植民地時代の入植者達の手書きの日記なども保管されている。また、図書館内にはギャラリーも併設されており、ヴィクトリア州の歴史を物語る貴重な絵画が常時展示されている。その他、定期的に様々な文化イベントやワークショップも開かれ、文化複合施設としての機能も果たしている。

メルボルンへ行く機会があれば、ぜひ立ち寄り、メルボルンの過去と現在を体感してみたい。

(出典:[前ページ・文中写真] Wikimedia Commons)

諦めないで、卒業論文を書こう

卒業論文の作成と社会福祉士国家試験の受験——私がこの二つをゼミ生募集の条件にあげるようになったのは2年前からです。

社会福祉士国家試験は例年1月の第4日曜日に実施されます。秋も深まるこの時期には、論文作成と試験勉強との両立でクラスは次第に緊迫感と重苦しい雰囲気にも覆われ、学生の表情も陰しくなります。ゼミの目標は12月早々に卒論を完成して教務課に提出し、その後は国家試験の勉強に集中することです。学生にとって4年の後期が一番苦しい、当に心臓破りの坂道です。しかしこれまでを振り返ると、卒論を書くほうが国家試験の合格率も高い、というのが私の実感です。ある学生が卒業式でこう語りました。「勉強に行き詰って図書館に行く、いつもゼミの仲間が勉強していました。みんなで励まし合えたから苦しい時を乗り越えられました」と。

ですから、特に社会福祉学科のみなさん。ゼミは僅か1年しかありませんが、諦めないで卒業論文を書きましょう。必須アイテムは、仲間とパソコンと図書館の活用です。

卒業論文を書くために「論文」を読もう

最初に提出されるゼミ生の研究テーマはいつも壮大です。テーマを絞り込むために、まずは先行研究の論文を何本か探して、じっくりと読むように勧めます。「論文の書き方」というマニュアル本ではなく、良質の「論文」を最初から最後まで舐めるように読むことで、論文の形式や約束事、研究方法や論の展開、テーマと結論の整合性など丸ごと掴むためです。もちろん、この時に論文を批判的に読み解く視点を忘れてはなりませんし、決して論文の文言を真似して格好いいテーマを取り出すことが目的でもありません。先行研究を読み進めるうちに特定の研究者に惹かれたり、テーマに惹かれたり、好きな論調に出会えたりすることでしょう。それを手本にして、自分の論文を組み立ててみましょう。壮大なテーマを絞り込み、自分の力量と限られた時間内で研究可能なピンホールを見出すのです。

学術ポータルを開こう

残念なことには、4年生になって初めて、図書館のオンライン・データベースやオンラインジャーナルを開く学生が多いことに驚かされます。図書館は「知の宝庫」と言われてきましたが、オンライン化によって蔵書数を超える膨大な文献を探ることが可能となりました。学術ポータルは見えない「知の宝庫」への入り口です。ここをクリックした途端、夜空に散りばめられた星座のように知の世界が広がります。まずパスファインダーの「教育・福祉」から「福祉」をクリックしてみてください。Webで福祉について調べるツールが並んでいます。あちこちのサイトを散策してみると思いかけない文献と出会います。思わず画面に吸い寄せられ、時間を忘れて読みふけるに違いありません。

年度当初に発行される「西南学院大学図書館ガイドブック」を大切に保管してその都度チェックすれば、迷うこともなく知の世界を駆け巡ることが適います。

図書館ガイドブック(学術ポータル)



VPNを利用すれば 自宅学習も拡がります

Webで調べる項の中に、VPNと青地に白抜きの印が目につきます。VPNとはVirtual Private Networkのことで、自分のパソコンからデータ検索を可能にするツールです。Active CampusからSAINSのサイトを開き、「利用できるサービス」の項から「VPN接続: 学生向け/教職員向け」に入ると、丁寧にその接続方法が案内されています。未だ全てのデータベースと言うわけには行きませんが、VPNは自宅でも頑張るあなたを支えてくれる心強い見方なのです。

パスファインダー(福祉について調べる)



知の宝庫である図書館を利用できるのは、大学に身を置く者の特権です。十分に活用して、納得のいく論文を書き上げてください。

コピーコーナー



コピーコーナー



コピーカード自動販売機

図書館の1F～4Fまでコピー機を設置しています。1枚10円で利用することができます。利用にはコピーカードが必要ですので、1Fの自動販売機で購入してください。

貸出を行っていない雑誌論文、参考図書、持ち運びの難しい資料等の複写に利用されると便利です。

また、図書館で所蔵している資料には著作権がありますので、本学図書館では**著作権法(31条)**の規程及び著作権関連機関からの答申により、以下のとおり運用しておりますので、ご協力をお願いいたします。

< 図書館でのコピーコーナーの運用 >

● 図書館資料の複写にのみ利用できます

● 著作物は著作者の死後50年を経過するまではコピーは一つの著作物の**半分以下**、定期刊行物(雑誌など)に掲載された論文や記事はその全部のコピーができます。ただし発行後相当の期間を経たもの**(次号が既刊となったもの、または発行後3ヶ月を経たもの等)**に限ります。

● 1人につき1部のみコピーが認められています。

● コピー機横に備え付けている **コピー申込用紙** に必要事項を記入のうえ、コピーを行ってください。

授業で使った資料や友達のノートは複写できません。

著作者(作者)の死後50年以上経過している資料は全部複写できます。

著作物全部を複写することはできません。

雑誌の最新号は複写できません。

1人で2部以上の複写はできません。

記入例

文献複写申込書

西南学院大学図書館蔵書

下記のとおり文献複写を申し込みます。

申込日	2020 年 10 月 1 日
身分	教職員・(学生) その他
所属	経済学系
学籍番号	12345678

書名(雑誌名)	巻・号・発行年	複写箇所	枚数
経済学雑誌	第100巻 (2020年)	38 ~ 45	8
経済学雑誌	第100巻 (2020年)	38 ~ 45	8

日付・身分・所属・学籍番号(氏名)を記入します。

書名(雑誌名)・巻号(発行年)・複写箇所・枚数を記入します。

コピー料金

1枚10円

コピーカード料金

30枚/ 300円
50枚/ 500円
100枚/1,000円

コピー機利用時間

閉館の15分前まで

※カラーコピーが必要な場合には、2Fのカラーコピー機にて利用が可能です。専用のコピーカードが必要ですので、閲覧カウンターにてお尋ねください。

コピー料金：1枚50円

De beschryving van Japan

「ケンペル『日本誌』:ファクシミリ版」

Engelbert Kaempfer,
Franeker, Uitgeverij Van Wijnen,
2000 [開架210/1/94]

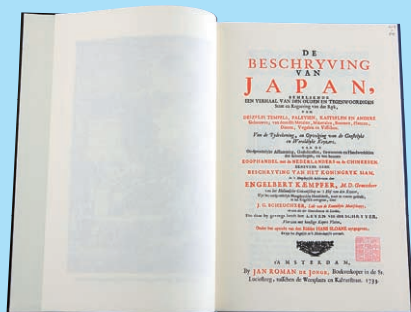


写真1:1733年発行のオランダ語版タイトルページ



写真2:日本の茶

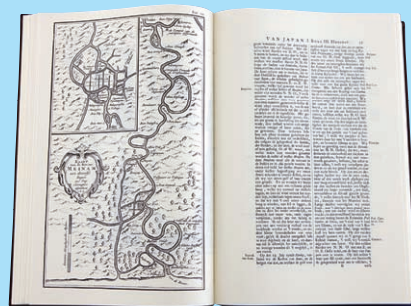


写真3:河口からアユタヤまでのメナム川(チャオプラヤール川)

ケンペルは好奇心に満ちた人だ。1651年にドイツのレムゴーに生まれ、内外を遍歴の後、1683年にはスウェーデンの使節の随員としてモスクワ経由でペルシアに渡った。使節団を離れた後、ペルシアの港町バンダレ・アッパースでは、大病に侵されるも九死に一生をえて、オランダ東インド会社船に社員として乗り込んだ。バタヴィアで相応の職は得られなかったが、医師として日本に向かう機会は巡ってきた。1690年に長崎出島に来着し、商館長に付随して二度、江戸を訪れている。1692年に日本を出立した後はオランダに向かい、再びヨーロッパの土を踏んだ。世界各地の見聞の一部を即座にまとめ、オランダのライデン大学に博士論文として提出し、学位を得て1694年に故郷に戻った。

これまでの旅で得た知識を故郷でまとめる計画であったが、状況はそれを許さなかった。世界各地をめぐる末、当時のヨーロッパで最先端の大学の一つであったライデン大学で博士号を得たという名声は、否応なく領主に侍医として召抱えられ、また、そうした社会的地位のおかげによる結婚は彼に最悪の研究環境を提供することになった。1712年、パイロット版としての『廻国奇観』を出版したが、集大成である『日本誌』をまとめるには至らず、1716年に死去した。出版された『日本誌』は残された草稿をもとに編集されたもので、諸版が存在する。(注1)

今回紹介するのは、『日本誌』オランダ語版(1733年再版本)のファクシミリ版である(写真1)。当初1727年に英語版が出版され、瞬く間にフランス語、オランダ語に翻訳された。『日本誌』には数多くの図版が掲載されている。本号の表紙は長崎街道図で、右下に長崎、左上に小倉が見えよう。当時、長崎街道はオランダ商館長一行の江戸参府ルートであった。また、本書には、後年、志筑忠雄が『鎖国論』として訳出する小論が付されているほか、日本産物についての科学的な「商品情報」も含まれている。茶もその一つで、中国茶に先立ち、既に日本の茶はオランダを通じてヨーロッパに輸入されていたが、科学的な紹介はケンペルが最初であったとされている(写真2)。

実は、『日本誌』は日本研究だけの書物ではない。ケンペルはバタヴィアから日本に至る途中、ひと月ほどタイのアユタヤに滞在した。そこで得た情報は『日本誌』の冒頭を飾っている(写真3)。ビルマ軍の攻撃でアユタヤ朝は1767年に崩壊したが、その際、各種の記録は灰燼に帰した。そのため、本書をはじめ、ヨーロッパ人の残した紀行文や東インド会社文書などはアユタヤ朝後期のタイ史研究に欠くことのできぬ貴重な史料となっているのである。

注1: エンゲルベルト・ケンペル著、今井正編訳『日本史:日本の歴史と紀行』霞ヶ関出版、2001年(1777-79年ドイツ語版からの翻訳) [開架291/09/116-1~7]

編集後記

読書の秋です。新聞・雑誌等で若者の読書離れの記事を目にすることがあります。読書は面倒という先入観が原因の一つかもしれませんが、普段の生活でメールを見る、ウェブサイトを見ることと同じで、読書もページの中の文字(テキスト)を読む行為といえます。読書をしない、本を読まない人でも日常生活の中で読書行為をしているのです。読書の秋を機会に携帯電話・パソコンで見るテキストを紙にちよつとだけ替えてみてください。読書といっても本の最初から最後まで読まなくてもいいのです。まずは気になるところや、読みたいところだけでも気楽に読んでみてください。(T.N)

※本紙で紹介した作品の画像の使用については、著作権者の許諾を得ています。

西南学院大学図書館報 No.165

2008(平成20)年10月21日発行

編集 図書館報編集委員会

発行 西南学院大学図書館

〒814-8511

福岡市早良区西新6丁目2番92号

TEL (092) 823-3426

<http://www.seinan-gu.ac.jp/library/>